

Message from Frontier



低酸素虚血による 脳障害発生率の 減少を目指す

古川 誠志 宮崎大学医学部産婦人科准教授

はじめに

宮崎大学医学部附属病院の周産母子センターは1996年4月に開設され、2008年に総合周産期母子医療センターの指定を受けた。同センターは、新生児を管理する9床の新生児集中治療室(NICU)、12床の新生児治療回復室(GCU)、2つの分娩室とハイリスク妊婦および胎児を24時間監視するための母体・胎児集中治療室(MFICU)を備えている。産婦人科医、小児科医、看護師らで構成されたチームが小児外科、小児循環器科、眼科などの他診療科と連携しながら、「世界を視野に地域からはじめよう」というスローガンを実践すべく母体および胎児期から新生児期にかけて一貫した診療を行っている。

ここでは、宮崎県の周産期医療体制や同センターの現

状に触れつつ、留学時代より胎児心拍数の研究に深く関わり、「胎児の脳障害発症率の減少」を目指してきた宮崎大学医学部産婦人科准教授の古川誠志先生に、胎児の脳神経系システムの生理と病理に関する最近の知見、今後の展望について語っていただいた。

宮崎県の周産期医療体制

宮崎県では、南北に長く、また交通事情が悪い山間地が多い地形を考慮し、産科の医療圏を県北、県央、県西、県南の4つのブロックに分け、周産期医療に対応できる体制づくりを推進してきた。そのなかで、県の周産期医療の中心的役割を担う宮崎大学医学部附属病院に総合周産期母子医療センターを、地域の拠点病院として中核的な役割を果たす6病院(宮崎県立延岡病院、古賀総合病院、宮崎県立宮崎病院、宮崎市郡医師会病院、国立病院機構都城医療センター、宮崎県立日南病院)に地域周産期母子医療センターを置き、地域の実情に合わせて各医療圏ごとに一次医療機関と地域の周産期母子医療センターが連携し、複数の医師がハイリスク分娩に対応できる体制を整備するとともに、さらに高度な対応が必要な事例に関しては総合周産期母子医療センターに搬送するシステムが構築されている。

また、総合および地域周産期母子医療センターの連携強化のために、1998年より年2回のペースで周産期症例検討会(peer-review conference)が開催されている



宮崎大学医学部附属病院外観